

## 平成4年度コロキウム発表要旨

第1回6月15日

演題：「正常な」嫉妬と病的嫉妬の臨床的比較検討

演者：高橋俊彦（保健科学部）

嫉妬Eifersucht, jalousieという言葉は、妬み（あるいは羨望）Neid, envieと区別されずに使われていることもあるが、多くの思想家、研究者が嫉妬を妬みと区別して定義している。ここでは精神医学者Friedmann, M. とTellenbach, H. の定義を参考にして少し長いが「他人との張り合いあるいは単なる他人の関与だけによってでも発生する、自分のものであると思っている何かが喪失するという恐れと同時にその他人を排除したいという衝動と結びついた、苦痛な心の動きとしての感情または情動」と考えた。妬みとの区別は多くの研究者と同様に、嫉妬が自分の所有する「もの」の喪失を恐れるのに対して、妬みはある「もの」を他人が所有していることについての感情であると考えている。したがって嫉妬や妬みという現象はそれ自体異常ではない。ここで「正常な」嫉妬としたのは、以下に述べるように、対人関係の枠組みにおける質的な異常を基盤にして成立した嫉妬ではないという意味である。

また嫉妬には性愛をテーマにしない嫉妬、たとえば地位や名誉をめぐる「志向性嫉妬」（Friedmann）もあるが、今回は性愛嫉妬に限った。嫉妬という現象を構成するのは、嫉妬している本人（以下Sと記す）、本人が所有する「もの」、すなわち嫉妬の対象（以下Oと記す）、その所有を脅かすとされるライバル（以下Rと記す）の三者である。対人関係の質から見れば、「正常な」嫉妬においてはS, O, Rの三者が同一平面にある。したがってSが嫉妬すればRを排除しようとするため、直接かOを通してかは別としてRに対してSの緊張が伝わり、SとRの間には相互に緊張関係が生じうる。

パラノイア性嫉妬の臨床例では嫉妬妄想という形をとり、Oはほとんどが配偶者である。SとOとは対人関係上、同一平面にあるが、Rは

その枠外である。Sにおいては、Oの関心がSに向くよりは仕事や趣味その他の方向に比重がかかり過ぎている、という不満が内在している。Sにおける嫉妬妄想の中では、その自分に向かないOの関心の向く方向の延長線上にRが据えられる。Rは、SとO二人の関係の中に生じた齟齬を埋めるために、SがOを通して「見た」妄想上の人物であり、いわば作り出された登場人物にすぎない。RはOの生活空間内に実在する人物には違いないが、Sによる物語は架空のものである。したがってSとRの間にはOをめぐる相互的な緊張関係は原則的には成立しない。

妄想型分裂病における嫉妬の場合は、Rそのものが実在していたとしても、個人としてのRではなく、組織、一味あるいは仲間と組んでSからOを奪おうとしている、とSによって体験される。ついにはO自身も敵方に回り、SとOとの関係そのものも同一の平面を形成することが困難になる。

以上、臨床的にみた「正常」嫉妬とパラノイア、妄想型分裂病などにおける病的嫉妬との比較を、嫉妬を構成する三者関係のあり方の違いから検討した。